せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編　纂　室
第三十五号　（一日発行）
平成四年八月一日

北海の鰊場

古平風土物語

高橋　源　五

一、喜びの小学一年生入学

大正八年四月一日・晴れ、鰊漁あり。正月からずっと日数を数えて待っていた、私の小学校入学の日である。入学式は昼からであった。家では、昨夜の刺網の走り鰊が好漁であったので、沖揚げ作業で忙しく、みんなは浜に出ていた。入学式には、六年生になった兄に連れて行ってもらった。当時、浜町の恵比須さん（神社）の裏の丘に、町を見下ろして建っている、新しい二階建ての校舎（現在の文化会館）に入りたいと思ってたが、下の方に建っている平屋建ての古い校舎であった。丘の上の校舎は、上学年にならなければ入れないという。

※当時はこの校舎の筋向かいに吉井旅館（現・中央旅館）があって、その浜側に町役場（現・西村さん宅）があった。そしてチョペタン川を渡ると、本陣の浜で、ここには古くからの古平場所請負人の運上所の大きな家（運上屋）が建っていた。（現・福津さん宅の場所）

私は、一年イ組であった。男女二人並びの古い机で、私の名前が貼ってあった。兄は、「ここがおまえの席だ。ここに座っていれ。」という。隣は、林という女子で、土場の人だった。教室には、母親に手を引かれたり、兄姉たちに連れられた子がたくさん集まっていた。顔に見覚えのある人もいたが名前がわからない。みんな新しそうに見える絣（かすり）や縞の着物に短い袴をつけ、女子は、頭の上にきれいな模様のついた輪をはめていた。だが男子の中には、青っぱなを垂らして、新しい着物の袖でこするものもいた。入学式が始まり、広い大きな、天井のやたらに高い体操場にみんなが集まった。「ガヤガヤ」がやっと静まった時、高い式壇の上に、背丈の高い、禿げ上がった額の中村校長先生が立った。話の最中で泣き出すもの、便所に連れていかれるもの、立ったままで小便をもらすものも出るありさまだった。

終わってから、受け持ちに決まった梅野モン先生に連れられて教室に入った。梅野先生は背がすらっと高く、頭の上に大きな束髪（当時の髪型）を結っていて、黒い紋付きの着物に、紺色の長い袴が良く似合っていた。

（筆者は、明治四十五年、小野寺源太郎七男として浜町に生まれ、古平小学校高等科三十三回生、札幌師範学校卒業後教員。現在、小樽市オタモイに在住）

△仲谷勇五郎が長沼で初の米作り

沢江村（町）に豪壮な大邸宅を構え（跡地に現在民宿）、手広く鰊漁場を経営していた△仲谷勇五郎は、長沼村（町）で広大な農場経営をしていた。

本州から北海道へ移住して開拓をする人たちのために、長沼町には明治二六年、植民地区画が設定された。翌二十七年に長沼村戸長役場が設置され、広い地域にわたって開拓が始まった。

同二十九年九月、古平郡沢江村三番地在住の仲谷勇五郎は、長沼町の南部、千歳川沿岸で約百ヘクタールの土地の貸し下げを受け、栗山町の＊泉麟太郎を代理人として開墾を始めた。

（＊元・奥州角田藩士で、栗山町・長沼町で大規模な開拓をし、後に栗山村長や道会議員となる。現横路知事の母、美喜さんの叔父）

そして、「南八号道路予定地北側用水路に係わる一切の件及び共同用水願い」を出願し、長沼町で最も早く水田を耕作を始めていた。

浜の夏祭りに躍る
たくましいエネルギー

沈滞気味だったふるさとに、再び活気が戻った。今年のお祭りだった。どこにあのようなエネルギーが残っていたのか驚きである。

好天にも恵まれ、何かスカッとした気持ちになりました。古平の伝統ある火祭りは、先人の残してくれた尊いものです。誰彼なくみんなが協力して、立派なお祭りになったことを喜んでいる一人です。人それぞれに考え方もあるでしょうが、私は、たかがお祭りごとではないように思います。力を合わせ、熱中してひとつのことに取り組むことが、ふるさと創生、まち起こしにつながるものだと思います。この行動力が、やがて、まちづくりの力となることを願うものです。

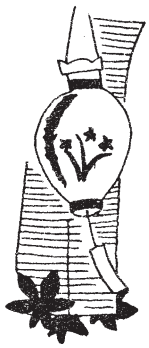
将来ある若者たちよ。古平に残って、それぞれに仕事を受け継いでいく青年に期待をかけてみたい。今回のお祭りを見て、若者の熱気を感じ、心強いものがありました。

古くとも、良い習慣には大いにこだわれ。そして、新しい道に挑戦せよ。矛盾するようだが、これが歴史であり、人生であるような気がする。

郷土が生んだ天才詩人・一穂の句に、『灯を消さずあれ　ふるさとは吹雪の中に』　味のある句だと、今ごろになって気付くあわれな私です。

これからは、先人が歩んで来た道より、もっともっと厳しい時代が来るかもし知れませんが、ふるさとの心の灯は消さないでほしい。

お祭りに奉仕された方は、ほんとうにご苦労様でした。



古平正調越後盆踊り歌

水見句丈

いよいよ八月となり、夏の風物詩でもある“盆踊り”の時期となりました。古平では、越後盆踊保存会（会長・堀昭夫さん）が中心になって埠頭で開かれ、北国の短い夏の夜を、昔ながらの情緒ある年中行事として楽しでいます。

町文連協の会長でもある水見句丈さんが、古平で昔から歌われている盆歌を“古平正調越後盆踊り歌”として書き留めたものを、小冊子にまとめましたが、部数が余りにも少なく、欲しいという方があってもお上げできませんでしたので、その中からいくつかをご紹介します。

橋の欄干に片袖下げて
　月の明りで文を読む
谷の一本橋私従いて渡る
　ここで落ちればもろともだ
踊り踊るなら三十が盛り
　三十過ぎれば子が踊る
私音頭とって踊らせるから
　夜明け烏の渡るまで
連れて行くから髪結い直せ
　鰊　古平場所までも

恋の九つ情けの七つ
　合わせて十六髷島田
踊り踊るなら品良く踊れ
　品の良い子を嫁にとる
恋に焦がれて鳴く蝉よりも
　鳴かぬほたるが身を焦がす
きりぎりす何の小癪な枕の下で
　思い切れ切れ切れと鳴く
蝦夷地海路にお神威なくば
　連れて行きたい場所までも

随筆

古平――（十一）

涛声文芸（下）

吉川　義雄

新地町の旧家、今（イゲタ三）の店主であった尾山清さんが、倉庫の奥深く眠っていた貴重な紙を見つけ出し、私たちに提供して下さった。万歳であった。混沌とした世の中で、自分の考えもまとめられずにいる仲間の一人ひとりに、とに角書けと、半ば強制的に原稿の提出をせかせるのが主幹の仕事であった気がする。最初の印刷は、役場の謄写版をチャッカリ借用し、後には自前の新品を駆使して、編集の斉藤嘉勝君はカラー印刷までマスターして、その見事な出来栄えは同人を感激させた。文章や詩や、短歌も俳句もあったようだが、鮮烈な一、二の作品を除いて、今は自分で何を書いたものやらそれすら思い出せない。毎月出したのか、何号まで続けたのかも定かでないが、戦争直後の暗くうず巻くカオスの中で、若者たちが肩寄せ合って拠った小さな城であったことだけは確かである。

仲間は亡くなったり離れたりの四十数年が過ぎ、『濤声文芸』は幻の同人誌となったと思っていたところ、東京在住の斉藤嘉勝君と札幌で再会することができた。六時間にも及ぶ昔話は途切れることを知らず、『濤声文芸』は、故水見喜多利氏に全部預けたという。それならいつか必ず対面できるだろうし、大いに楽しみにしている。

積丹半島へ鉄道敷設を（十一）

鉄道への夢は遠のき

脚光を浴びる海岸道路

昭和二十七年一月二十二日、第一回臨時町議会が開かれ、鉄道敷設について、町長、議長が今月中旬までに上京し、請願運動をすることが決定された。

請願書は、第一区選出の代議士小川原政信の紹介で、衆議院運輸委員会で取り上げられ議決された。

「二、請願の議決理由

地方資源の開発ならびに運輸経路上の見地より、請願区間の鉄道敷設につき調査研究せしめるよう措置するを適当と認め、本請願は、これを議院の会議に付して採択すべきものと議決した。なお、本請願は、これを議院において採択の上は内閣に送付すべきものと認める。

右報告する。

昭和二十七年六月二十八日

運輸委員会　岡村利右衛門

衆議院議長　林　譲治殿」

昭和二十六年に設置された鉄道建設審議会が、建設線の選定基準を決定し、翌年から建設が再開されたが、積丹半島の鉄道敷設はその基準に満たなかった。昭和二十八年、第十六特別国会で鉄道敷設法の一部改正があり本道の黒松内～岩内間、ほか三線と、青函海底トンネルが新線として追加された。

積丹半島の鉄道敷設は、もはや実現できる情況ではなくなっていた。

この頃、夢にも考えられなかった海岸道路の建設が着々と進み、また、神恵内間の横断道路も建設にかかり町民の話題と関心はその方に向いていた。

おしらせ

吉田一穂遺品展

★期日・８月７～９日★会場・文化会館

★観覧時間・午前１０時～午後４時

★講演会・★作品解説も開かれます

（８／６新聞折り込みをご覧下さい）

おしらせ

『後志情況報文』より

二十世紀初めの《古平郡》

沖村（現在の沖町）

東はチャラツナイ岬で余市町沖村と続き、北は海に面し、山々が重なり平地が乏しく、チャラツナイ岬からセタカムイ岩までは絶壁で通行ができない。歌棄・沢江両村へは、石のある海岸沿いの狭い道を通って行かなければならない。古平市街までは一里三十三町余り（約八㌔）あり、荷物は舟で運んでいる。

沖村は、昔アイヌ語で「ラルマキ」と言い、これは「水松（オンコ）」のことである。アイヌの部落があり、漁場の請負人が番屋、雑倉などを建て、出稼ぎ漁民が来ていた。明治五年、沖村と改称し、次第に人家も増えてきたが、アイヌは、明治十年ころには全く姿を消していた。明治三十三年の戸数は、七十七戸、人口四百四十人で、青森、新潟の二県からの移住者が最も多く、明治の初め出稼ぎに来ていて、そのまま住んでいる家も四戸ある。人家は、字番屋の沢昔ラルマキと言っていた所に集まっている。また、鰊漁期間には、海岸に仮小屋を建てて住む者もいた。

漁業は、鰊漁が中心で、その他は村内で消費するだけである。明治三十一年には、建網十九か統、刺網八百六十八放で、その漁獲高は二千八百四十九石で、翌三十二年は四千七百五十石であった。

建網は、一か統で二百五十石取れば収支償い、刺網では一人たいてい十二、三放を使い、五、六石あれば漁として普通であった。建網の貸借は中等の所で、海面だけであれば二百円から三百円、干場や道具がつくと四、五百円だが、本村の中で最良の場所だと、およそ一万円と言われている。海岸は平地が少なく干場が無いので、皆山に干場を作り、そのため魚粕を運搬するのが大変不便であった。

【今日はこんな日】

同窓会誌発刊『白鳥古丹』

昭和35年

古平小学校統合校舎の新築にむけて、同窓会の活動も次第に活発になってきた。

昭和十年、開校六十周年記念協賛会ができたときに、同窓会の組織についても整備され、協賛会長であった高野常三郎が同窓会長になった。

やがて戦争も激しくなり、そして終戦。新しい学校制度も何とか軌道に乗った昭和二十七年、同窓会が再建され、会長に本間権平が選任され、開校七十七年記念行事に協賛した。

昭和三十四年、本間会長の死去により、松座好雄が会長に選任された。

新校舎の建設という大事業を目前に、同窓会としての協力体制を一層充実させることもあり、「同窓会報」を発行して、会としての活動と、協力を会員に呼びかけた。会報は「白鳥古丹」と名づけられた。

「――この歴史ある本校卒業生諸賢の親睦と、融和を永く持続せんとして、本会報を発行する次第であります。」

（同窓会長　松座好雄）

「学校も制度の変遷と共に現在の六年制の小学校になりましたが、後輩である児童たちは、校庭に茂る樹々のようにすくすくと成長しております。私ども教職員三十三人は、この子どもたちの幸福を願って、日夜精進を続けております。」

（学校長　八幡平司）

「ふるさとを同じうしたる秋天下　素十。老い朽ちた校舎を背景に、永い教育を思わせるうっそうとした植え込みの中にこんな句碑が立っている。

歩んできた道と、その生き方は人それぞれに異なるだろうが、同じ小学校に学んだという縁故は深い。

古平小学校同窓会報の発刊によって、ふるさとを同じうし、学窓を共にした一万の同窓生が、さらに固い絆に結ばれて、我が天下を謳歌することまた〝善き哉〟である。

（古平町長　伊藤由松）